

「マイ・ストーリー」を描き、それを語れる力が、これからの大学入試で希望進路を実現するために必要とされることを検証し、そうした力を生徒に育む教師の指導や支援のあり方・方法を、実践事例を通じてお伝えしたVIEWnext高校版 2021年8月号・特集はこちら ▶



「マイ・ストーリー」とは、生徒一人ひとりの「自分のこれまでの学びや活動、その成果や結果に至るまでのプロセス、これからの展望」を指す。総合型選抜や学校推薦型選抜（以下、推薦型選抜）を始めとするこれからの大学入試に向けて、「マイ・ストーリー」を描き、それを語れる力を生徒に育む実践事例を紹介する。

2年次

推薦型選抜の準備

支援開始を早期化。1対1で「なぜ」と

繰り返し問い、希望進路を明確化

千葉県・私立日出学園中学校・高校

マイ・ストーリー 2年次の課題

- ・ 推薦型選抜を志望する生徒に、早めに対策に取り組み覚悟を持たせる
- ・ 足りないものを補ったり、軌道修正したりすることができるように、「マイ・ストーリー」を突き詰めて考えさせる

2年次の9月に説明会を開き、推薦型選抜受験の覚悟を問う

首都圏の私立大学への進学者が多い千葉県・私立日出学園中学校・高校は、推薦型選抜志望者を教師が1対1で支援するメンター制度を、2年次の10月から実施している。2015年度に同制度を設けたが、それまでの推薦型選抜の指導は、生徒から受験の相談を受けてから始めていたため、多くの場合、3年次に慌てて着手する状況だった。しかも、推薦型選抜志望者の進路意識に課題があったと、高校2学年主任の坂井郁子先生は語る。

「特に指定校制の推薦型選抜では、早く進路を決めたいだけの生徒が少なからずいて、志望する学部・学科で学びたい理由を明確にすることができないまま、進学する生徒もいました。大学進学の間機を内発的なものに変えるには、生徒が進路に向き合う時間が必要だと痛感しました」

そうした課題を踏まえ、推薦型選抜の指導を次のように改めた（図）。2年次の9月、これまでの推薦型選抜の合格体験談を踏まえつつ、教師が推薦型選抜の仕組みを解説する説明会を実施。推薦型選抜志望者は、10月までに、志望校の3つのポリシーと志望理由を

まとめて進路指導部に提出する。進路指導部は、生徒の志望学部に応じて、また、人数が偏らないように、各教科に生徒を割り振る。そして、各教科内で、指導を担当する教師を決め、入試本番に向けて、志望理由書の作成や模擬面接などの指導を1対1で行う。

説明会には、1学年のうち約8割が参加するが、その後、書類を提出するのは20〜40人だと言う。説明会は、推薦型選抜対策に本気で取り組む覚悟があるかを問いかける場だと、進路指導部部長の竹村和晃先生は話す。

「1年次から推薦型選抜の仕組みや求められる力について説明していますが、大学の推薦型選抜対策に対して楽観的な生徒や保護者は少なくありません。説明会では、推薦型選抜対策と並行して一般選抜に向けた学習にも取り組む重要性を、総合型選抜に不合格だった卒業生の実例を交えて伝えていきます」

「自分に足りないもの」を考えさせ、生徒の自発的な行動につなげる

1対1の指導では、生徒との丁寧な対話を大切にしていくと、竹村先生は語る。

「対策の開始時点では、生徒の志望理由は『〇〇大学に興味がある』といった程度にとどまっていることが多いです。そこで、教師が『なぜ』と繰り返し問いかけることで、生徒が興味を持った理由を掘り下げて、『マイ・ストーリー』につながる自分の思いに気づけるようにして

メンター制度による指導を行うまでの準備と、指導の具体例

高校1年次

- ・在校生の保護者による職業講演会を実施。
- ・保護者会で推薦型選抜を中心に大学入試制度について説明。
- ・各大学のオープンキャンパスでの模擬講義や、オンラインの模擬講義を受講し、感想を提出。
- ・志望校の検討に向けて、大学・学部・学科を比較研究。

高校2年次9月

推薦型選抜の説明会を実施。卒業生の推薦型選抜の体験を伝え、推薦型選抜の仕組みや推薦指導の進め方を説明。

高校2年次10月

推薦型選抜志望者は、志望校の3つのポリシー、志望理由をまとめて進路指導部に提出。

提出書類で生徒の進路意識や志望学部を把握し、その内容に応じて、担当教科を割り振る。教科内で担当教師を決め、順次、「マイ・ストーリー」を語れるようになるための支援を開始。

指導例



能見先生 まず、志望理由書を書かせ(活動履歴、将来の希望、志望校のアドミッション・ポリシーの箇条書きでも可)、志望学部に関する知識不足、熱意を伝える材料不足など、「マイ・ストーリー」の中で補う部分を浮き彫りにして、生徒に助言。書く材料がそろってきたら、志望理由書の作成を本格的に始め、その内容を基に面接対策を行う。



坂井先生 志望の学部系統に関連する新聞記事の要約と意見文を週1回程度、提出させる。並行して、志望校の書式で志望理由書の作成を始め、3年次1学期末までにいったん仕上げる。該当年度の募集要項が出たら、実際の書式に合わせて調整し、志望理由書を完成させ、その内容を基に、面接や小論文の対策を行う。

※学校資料と取材を基に編集部で作成。



左から/竹村和晃(進路指導部部长)、皆川真由子(高校1学年副担任)、坂井郁子(高校2学年主任)、能見太郎(高校3学年主任)

学校概要

- ◎設立 1950(昭和25)年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約160人
- ◎2022年度入試合格実績(現役のみ) 国立大は、埼玉大、千葉大、東京外国語大、東京海洋大、東京学芸大、愛媛大、長崎大、石川県立大に13人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大学、明治大、立教大、早稲田大などに延べ530人が合格。

ウェブオリジナル記事では、教師が生徒と対話を進める方法や、メンター制度に関する課題と展望などを紹介!

VIEWnext ONLINE ▶▶



います。そうした働きかけは、1対1だからこそできることであり、時間も必要です」

支援の進め方は、各教師がそれぞれ工夫している(図)。高校3学年主任の能見太郎先生は、担当した生徒には最初に、これまでの活動と将来の希望、志望校のアドミッション・ポリシーを書かせ、それが「マイ・ストーリー」になっているかを問いかける。

「多くの生徒は、志望校への熱意を説得力のある具体例とともに表すことができません。現時点での『マイ・ストーリー』を振り返り、何が足りず、それをどう埋めればよいかを、生徒と一緒に探ることから対策を始めます」

2年次10月からメンター制度を実施することで、「マイ・ストーリー」に足りないものを補う時間を持つことができる。また、志望大学・学部に関連感を持ち、志望を変更したとしても、十分に対応することができる。例え

ば、臨床検査技師の資格取得が可能な生物系学科の指定校制の学校推薦型選抜を志望していた生徒は、最終的に、臨床検査技術の専攻がある大学の学校推薦型選抜を受験した。指導を担当した高校1学年副担任の皆川真由子先生は、生徒の意識の変化をこう振り返る。

「その生徒は、資格が取ればどの大学でも同じと考えていたので、『なぜ、資格を取りたいのか』『大学で何を学びたいのか』と、将来の展望の視点から何度も問いかけてきました。すると、大学・学部について詳しく調べるようになり、専門的な学科の方が授業や実習でより実践的に学べるからと、志望校を変更しました。選抜方式が変わり、勉強が大変になりました。生徒は頑張り、無事に合格しました」

推薦型選抜の支援体制が整い、各教師に支援ノウハウが蓄積されてきたことから、今後は全校でそれらの共有を進めていく考えだ。